

一つの石とともに人生を味わう

karinomaki

## 躓きの石

---

この文章では、カントの哲学を一つの視点から読むことにより、人生において大切なことを書きたいと思います。

「躓きの石」は、カントの哲学の中に出てくる言葉です。文字どおり躓いてしまう邪魔な石ですが、この石を基軸にして、人生において、人の心の美を邪魔する、どろどろした気持ちを、どうやって美化するかを、カント哲学から読み解いてみたいと思います。

## 清濁併せ呑む

---

どんなに人生はいいものだと思っても、次の瞬間にはもう、時間がよどんだものを感じられる・・・そんな経験をたえず人はくりかえしているものかもしれません。そこからどうやってのがれ、本当に美しい人生をおくれるのかを、私はずっと考えてきましたが、最近、「のがれる」という態度そのものが、おかしいのだという気がしてきました。確かに、苦しみと戦いすぎて、人生がいやになってはよくありませんが、人生を「味わうもの」と考えてはどうでしょうか。本当に味わうためには、上澄み液を飲むだけではだめなのです。苦しみと喜びをかき混ぜて、全てを飲み込まねば、本当の人生の味はわからないのです。

カントの哲学書の実践理性批判で登場する、「躓きの石」は、正に清濁併せ呑む（せいだくあわせのむ）意味を持っています。これは、カントが自由の難しさを表した言葉ですが、この言葉にカントの三大批判書の全ての苦しみと美を集約させて読むということをする、カントの哲学を人生になぞらえて、味わうということが出来る気がするのです。

## 判断力批判

---

カントは、判断力批判という著書で、芸術と自然について書いています。カントは、純粹理性批判で自然界の認識についてまず書き、実践理性批判で道徳について書いていますが、この、実践理性批判における、道徳は、とても成立が困難と思われるほど厳しいものです。カントは、「自由」ということばを中心に、書いているのですが、この「自由」を、「躓きの石」と書いて、道徳の難しさを表しています。おおざっぱに言えば、自然界（感性界）の上に、道徳の世界（叡智界）が成り立つのですが（人間界の頭上に神の世界[道徳の世界]があると考えてください）、私は、この、叡智界の成立の難しさ、道徳の成立の難しさを、感性界と叡智界の間（純粹理性批判と実践理性批判の間）に、「躓きの石」があるからだと考えことにします。（これは、特殊な考え方ですが、カントの哲学をわかりやすくするためです。）

すると、面白いことが起こります。この、躓きの石は、カントの三つ目の批判書である、判断力批判と重なるのです。（この解釈は、「心で読むカント哲学」で、詳しく書いています。）

この考え方を軸に、判断力批判の中の、「芸術」について、書いてみたいと思います。

## 芸術の力

---

躓きの石と、判断力批判（芸術）が重なるとはどういうことでしょうか。「躓きの石」とは、自由（道徳）の成立の難しさです。それがどうして芸術と重なるのでしょうか。

自由とは、もともと堅苦しく、厳しいイメージはないのかもしれませんが。心が自由であることが芸術をつくりだすのに最も必要なことかと思います。しかし、カントは自由を、成立の難しい道徳として書いています。自由には二つの側面があるのです。

例えば、この世界が、何をしてでも自由な世界であり、常識も規則も法律もない世界だとすれば、この世界は、犯罪や戦争を防ぐことはできないでしょう。自分を律する道徳のもとに、初めて自由が成り立つのです。そう考えると、自由はとても難しいものなのです。自分で自分を律することはとても難しいことだからです。しかし、一方で、自由は、「空を羽ばたく鳥のような」イメージもあります。

私はこう考えてみました。自由は、道徳の側から見れば、邪魔でやっかいな、「躓きの石」かもしれない。しかし、芸術の側から見れば、空を羽ばたくような、透き通ったものと言える。それでは、芸術というものは、躓きの石を透視して、水晶に変えて、自由を成立させる力を持っているのではないかと。だから、判断力批判（芸術、自然についての著書）は、実践理性批判よりあとに書かれたにもかかわらず、一つ目の純粋理性批判と、次の実践理性批判の間の躓きの石の位置に存在して、実践理性批判の自由を支えているのだと。

## 創作のエネルギー

---

芸術は、創作することと言えます。その創作のエネルギーとはなんでしょうか。それは、「向き合う」という姿勢です。つまり、苦しい課題と向き合わなければならないのです。このことを、躓きの石を軸に考えてみると、判断力批判の芸術の位置にある躓きの石を透視する（→課題と向き合う）ときに、創作のエネルギーがわき、課題が分解する（解決する）のです。そのとき、初めて人は苦しみがというものが、創作のための課題であったと悟ります。そして、それがわかったことで、とてつもない感動（快の感情）が生じるのです。そのときこそ、躓きの石の濁りは分解されて、美しい水晶にかわっているのです。

カントが判断力を「快・不快の感情」と表すのは、こういう意味があるからでしょう。

## 合目的性

---

カントが判断力批判でくりかえし用いている言葉で、「合目的性」という言葉があります。

これは、「ある事物が一定の目的にかなった仕方で存在していること」という意味ですが、意識すると、「美しいものを見て、その素晴らしさによる、快の感情をもたらすもの（美的判断の基礎）」です。この「目的」とは、意識すると、どうして自分が苦しかったのか、苦しい課題を与えられていたのかという神が与えた人生の目的のことだと思ふのです。人は美しいものを見て感動し、苦しかった意味を悟る（人生の苦しみが与えられた目的を理解する）のです。そのときに、快の感情が生じるのですね。芸術家が創作した作品や、神が創った自然は、創る側だけでなく、見る側にも、人生の苦しみを解きほぐし、その意味を悟るときの快をもたらす意味があるのですね。

## カントにとっての「石」

---

苦しみがエネルギーになり、創作が生まれる。ベートーベンもモーツァルトもそうだったと思います。しかし、カントにとってはどうだったのでしょうか。

カントは、自由という、躓きの石を、「躓き」というマイナスの名前をつけながらも、死守しようとしていたと思われまふ。カントは、最初の純粋理性批判で、自然界から、自然を越えた世界（神の世界？）への積み上げと飛躍を試みまふ。そして、次の実践理性批判で、自由について書くことで、自由こそが可想界（自然を越えた世界）を可能にするものと書きました。しかし、「自由」は、人間が苦しみの中から編み出し、大きな責任を背負いながら成立させるものだったのです。その苦しみがな、幸せなだけの自由があるならどんなにいいかとも思っただけかもしれまふ。しかし、自由が苦しいものであることには、深い意味があるのです。少し複雑になりますが、さっきの話をおし出して下さい。自由（躓きの石）は、純粋理性批判と実践理性批判の間の、判断力批判の位置にあるのです。つまり、判断力（創作）の場所で、人生の課題と向き合、その意味を探ることで、躓きの石は美しく分解されるのです。躓きの石は、まさに「清濁併せ呑む」ものであり、自由は、人が重い責任をになつて成立させるから、真に道徳的で、美しいものになるのです。芸術を成立させる判断力は、苦しい自然界（純粋理性批判）から本当に美しい道徳の世界、自由の世界（実践理性批判）への、「濁」から「清」の橋わたしをしているのです。

カントにとっての大切な「石」は、人生の清と濁をあわせ持つ、味わい深い「躓きの石」であるのです。

この石によって、三つの批判書はつながれると考えると、カントの哲学を理解しやすくなるのです。

## 人生の味

---

人生は、躓きの石と同じく、清濁併せ呑むものと言えると思います。美しいだけ、楽しいだけでは、味がなく、本当の人生の味は、「苦しいから楽しい」ということをわかることで、味わえるものだと思います。躓きの石は、カントにとって、哲学の宝であり、創作することの宝でもあったと思います。濁っているから、磨こうとするのです。そして、磨くことができたとき、最高の喜びがあります。人生の課題を自分なりに解いたとき、石を磨いたと言えます。カントの哲学によって、また、美しい芸術作品や音楽にふれて、人生の苦しみが解きほぐされたときの喜びの瞬間も、間違いなく石を磨けたときです。そんな瞬間をたくさん味わうために苦しみを与えられるのなら、人生は素晴らしいものだと思えるでしょう。人は、純粋理性批判の感性界から、実践理性批判の道徳的自由を目指す。しかし、美しい世界になかなか行けず、間の躓きの石の濁りの中で苦しみ、芸術や自然にふれて、石を磨いていく（判断力批判）。そう考えると、カント哲学は読みやすくなるでしょう。純粋理性批判と実践理性批判の間に躓きの石があり、この石が判断力批判と重なると、大まかに考えてみることで、この三つの批判書が人生の縮図となっていることがわかるのです。